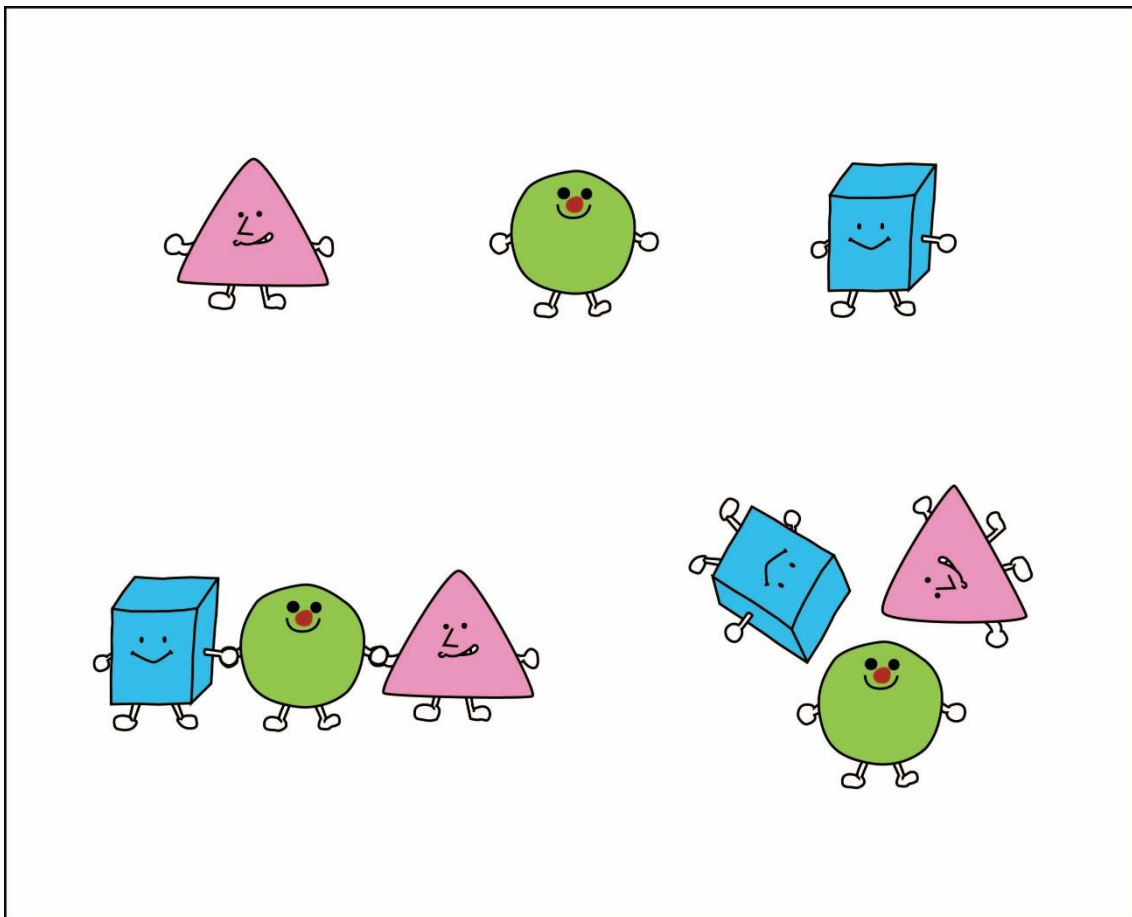


# 生活訓練つみき



## 実践報告 Vo1

## 目次

はじめに	IIIチーム連携
	1) 経緯
	2) 現状
I 構造化の紹介	IV 集団支援実践
1) 物理的構造化	1) 調理のメニューきめ
2) 視覚的構造化	2) 調理
3) 時間の構造化	3) 活動に関するさまざまな工夫
II 引越し前から引越し後	おわりに
1) 引越し前の環境整備	
2) 引越し前と引越し後の比較	参考文献
3) 現在の環境整備	

## はじめに

生活訓練つみき（以後、つみき）は 2014 年に住之江で開所し、これまで運営してきた。しかし、利用者（以後、学生）の過半数は 18 歳以上の区分 5, 6 の知的障がいを抱えている方々（平均区分は 5.2）がサービスを受けて過ごしていくには狭いのではないかといった家族さんからのご意見をたくさんいただき、2015 年の 7 月に南住吉のほうへ移転することになった。

利用状況については次の通りである。2014 年は 4 名（1 期生 4 名）、2015 年は 10 名（1 期生 4 名：2 期生 6 名）、2016 年は 10 名（2 期生 6 名：3 期生 4 名）。またスタッフ体制は職員 2 名のパートスタッフが 2 人か 3 人である。少ないときは職員 2 人で現場対応にあたる時もしばしばみられる。

本稿では少ないスタッフ体制のなかで、どういう風に学生たちの思いに寄り添い、一人ひとりが持っている力をいかに引き出すことができるのかをチームで検討し続けてきた 2015 年 4 月～2017 年 3 月の 2 年間の実践をご紹介していきたい。また本文で ABA や TEACCH などを用いる用語が所々でてくるが、これらは日々、現場スタッフが奮闘し独学で得た知識をみんなで悩みながら実践している一事例として捉えていただきたい。また完璧にできているとも思っていないので、ご意見などいただけると幸いです。

## I 構造化の紹介

本章では住ノ江のつみきの構造化の工夫や、現在のつみきの構造化の工夫についてご紹介していきたい。またつみきにおける構造化の認識は、「いつ」「どこで」「なにを」「どのような方法で」「どうなったら終わりなのか」などを視覚的にわかりやすく伝える。すなわち「本人が過ごしやすい環境」を作ることである。

つみきでは構造化をととても重宝している。むしろ構造化なしでは支援にあたることはできない。なぜなら、我々の日常生活も視覚的情報、構造化された環境のなかで過ごしているからだ。

例えば「信号が赤なら止まる」といった交通ルールなんかはわかりやすいだろう。もしくは大手スーパーに行くと、〇〇商品はどこに置いてあるか視てわかるように工夫されている。飲食店へ行くと、アルバイトが一人で手順書をみながら、業務をしているとか、意外と日常生活をゆっくり視ていると「構造化って結構、普通やね」とスタッフ間の振り返りでよく意見としてあがる。

「学生たちが卒業しても自身で視て判断し行動できるように」がスタッフ一同の思いである。またそれは構造化の目的である「自立」という言葉に言い換えることもできよう。

### 1) 物理的構造化

例：本棚や机などの配置の意味をわかりやすくする。

before ↓



after ↓



構造化前は個室の使い方に悩み、物置部屋となっていた。構造化したきっかけは休み時間にパソコンやIpadをめぐるケンカが多く、収集がつかなくなってきていた。順番を守らない、順番抜かし、時間を守らない、活動に参加しないなどなど・・・



環境整備後は、左の写真のように順番を守れるよう小さいホワイトボードに順番「1, 2, 3」の横に自身の写真カードをはり、タイマーを10分に設定して取り組んでもらっていた。そうすることで時間を守り、過ごすことができるようになった。またパーテーションをすることで余計な情報を遮断し、余暇に集中できるよう工夫をした。

## 2) 視覚的構造化

例：色・絵・文字などによって示された指示を自身で判断できるようにする。



これまでではご自身の好きなものを選び、活動に参加することができていたが、それが毎度の流れになってしまい、他の人がいつまでもできないということが続いた。

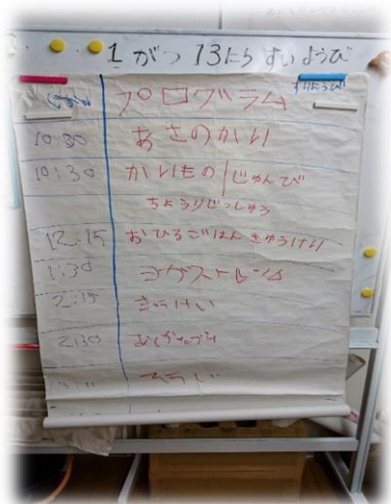
そのような経緯があり、好きな活動でも苦手な活動でも参加できるように、また苦手だとしてもそれを自発的に「いやです。」といったことを表出できるよう環境整備が大事なのではないかと考えて変更した。

今は苦手な活動も好きな活動も役割分担を全うして取り組むことができている。また抽象的な言葉も意味を理解し始めている。ただし、つみきだけに限るので、卒後の進路先と連携し、取り組んでいくことが大切だと考えている。

## 3) スケジュール（時間の構造化）

例：どのような予定で進むのか予告し、それをいつでも見えるようにする。

before ↓



after 個別のスケジュール ↓



after 集団のスケジュール↓



以前は朝の会と終わりの会にのみスケジュールを提示していた。その結果、見通しをもてない学生は活動の合間に手持ち無沙汰になり、気になる行動が多く見られた。また声かけによる促しで活動に参加されていた学生が多かった。工夫後は、スケジュールをこまめに学生が確認をして次の活動へ自発的に参加したり、使用済みのイラストカードをブックに片付けたりとスタッフの声かけなしで自発的な行動が増え、気になる行動は減少した。

## II 引越し前から引越し後

### 1) 引越し前の環境整備

before ↓



after ↓



構造化前はメンバー同士の接触がしやすい環境で、左上の通り学生同士向かいあう形になっていた。視界に入るものも刺激的で気になる情報（家具や教材、人など）が多かった。

スタッフ間で話し合い、もっと学生たちが集中して活動に取り組めるような形として右上の写真のような配置にした。パーティションや教材や家具などをなるべく学生たちの視界に入らないように配置することで以前に比べて集中して取り組めるようになった。さらに向かい合わせでなく、ホワイトボードを学生たちが視て活動に取り組めるよう席の配置も変更した。

## 2) 引越し前と引越し後の比較

### ①調理のメニューきめ

before ↓



after ↓



### ②朝の会の様子

before



after



上に挙げた4枚の写真をみてわかるように before の概観はモノがいっぱいあり、ゴチャゴチャした様子が伺える。一方、after では余計な情報はすべてカットし、学生たちが前を向いて取り組めるよう工夫している。

### 3) 現在の環境整備

before



after



before



after



家具や教材など余計な情報は遮断し、必要な情報（スケジュールや役割分担、手順書など）をホワイトボードに記載・注目できるように工夫をした。パーテーションの裏は通路になるよう導線をひいた。そうすることで教材を取りに行く際、学生同士の接触は減少した。



つみきの構造化は、学生、一人ひとりのために実施している。そのため活動の一環で過ごしやすい環境をみんなで考えて一緒に作っている。それはすなわち構造化の目的である「自立」をモデルにしている。そして「自立」を促す上で「豊かで質の高い生活」をいかに支援者である我々ス

タッフがチームで協力してどのような形で提供していかるか日々、以下の項目を意識して取り組んでいる。

- 理解しやすくする。
- 混乱を少なくする。
- 効果的な学習・活動を助ける。
- 自閉症の人たちが自立的に生活できる。

### Ⅲ チーム連携

つみきではパートスタッフ（非常勤の方々）のみなさんの協力なしでは運営が難しい。日々、支援の方法や環境整備など一緒に考え、学生一人ひとりが安心して楽しく理解して過ごして学んでいけるよう工夫している。本章ではチーム連携に至るまでの流れと現状についてご紹介していきたい。

#### 1) 経緯

つみきでは設立当初からパートさんがいて個別・集団支援に携わっていただいていた。冒頭でも述べたように平均区分 5.2 と比較的重度な知的障がいをお持ちの学生が多かったため、障がいの理解や個別対応など専門的な知識・スキルを要した。また男性の学生比率が高いのに比べ、スタッフは男性 1 人で女性 4 名であり、個別対応などは安全面を配慮して男性スタッフが日常的になっていた、そのため、支援の統一はつみきの大きな課題であった。当初の課題は以下の通りであった。

<メリット>

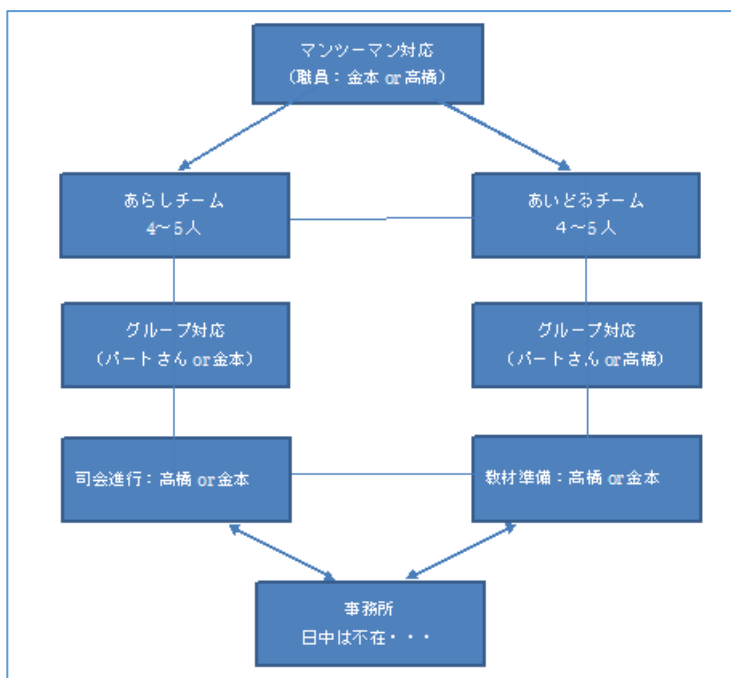
- 職員が対応することが多いので、職員間における支援の統一、連携は完璧？？

<デメリット>

- 職員の負担が大きい。



- 周りをみる余裕がなくなる。
- パートさんと連携がとれない。
- 支援の統一ができない。
- 職員とパートさんの間にみえない壁がうまれる。
- 現場の雰囲気が重苦しくなる。
- 重苦しい雰囲気は利用者さんにも影響が・・・



左図に記載されている金本、高橋は職員である。パートさんに対応していただきたいところを報告・連絡・相談不足だったため、職員が対応することが日常的であった。

「パートさんともっと連携して仲良く、楽しく支援に携わりたい。」という思いを胸に統一した支援を目指すもののパートさんは15時上がり、16時上がりが多い。そのため、夕方に勉強会を設定しても、参加が難しかった。また現場対応や日々の雑務に追われ、1ヶ月に1回がしたくてもできなかった。最初は、自閉症に関する本を事務所に置いてみたり、マーカーで大事そうなところをチェックして置いてみたり、漫画で理解するようなものに補足を付け加えたりなど、思いつく工夫をできる限り取り組んだ。そんな中、パートさんより職員に対する手紙をいただいた。それは日々の支援に関する悩み事や不安などであった。手紙を読んで、課題が職員目標になった。(以下の通り)

れ、1ヶ月に1回がしたくてもできなかった。最初は、自閉症に関する本を事務所に置いてみたり、マーカーで大事そうなところをチェックして置いてみたり、漫画で理解するようなものに補足を付け加えたりなど、思いつく工夫をできる限り取り組んだ。そんな中、パートさんより職員に対する手紙をいただいた。それは日々の支援に関する悩み事や不安などであった。手紙を読んで、課題が職員目標になった。(以下の通り)

### 報告・連絡・相談

(例)「〇〇くんから離れます。〇〇さん見守りお願いします」とか「トイレいきます」

※支援の統一はモデルや動画をみせて、丁寧にお伝えします。またそのなかでパートさんの気づきも大切にしながら、どうすればよいか話あってきめる。

### コミュニケーション

「おはようございます」「こんにちは」「ありがとうございます」「今日は～でしたねえ。」

※些細なことでも「ありがとう」の気持ちはすぐ伝えるように心がけている。

### 信頼関係の構築

パートさん一人ひとりの思いや意見に耳を傾け、一緒につみきを作っていける方法を日々、模索している。パートさんを仲間として信頼することを大切にしている。

## 2) 現状

3つの目標「報告・連絡・相談」「コミュニケーション」「信頼関係の構築」を目標に日々、取り組むことで以下のような変化が現れた。

・職員の負担が大きい。

→一人ひとりの負担が減った。

・周りをみる余裕がなくなる。

→周りをみる目が増えた。行動観察で得る情報が多くなる。

→振り返りでまとまった支援内容を次回に活かす。

・パートさんと連携がとれない。

→些細なことでも報告・連絡・相談することで臨機応変な対応が可能となった。

・支援の統一ができない。

→モデルや動画をみせて丁寧に伝える。修正箇所やアイデアは相談して実践。

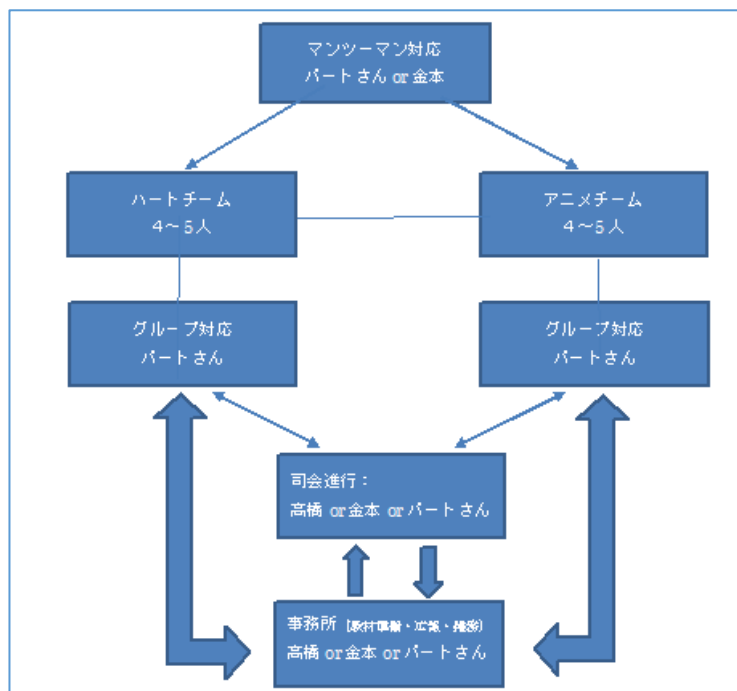
→パートさん自身のスキルアップ・自信につながっている。

・職員とパートさんの間にみえない壁がうまれる。現場の雰囲気重苦しくなる。

→些細なことでも情報共有して相談して実践するので、チームとしての一体感が増している。連携して利用者さんを支えるので落ち着いて過ごしている。

現在は右図のようにパートさんがグループ対応や個別対応、司会進行を担っていただくようになった。さらに事務所で以下のような雑務（おもに教材準備）をしていただくようになり、少しずつ支援の質が高くなっている。

- ・フォトアルバム作成
- ・卒業式のスライドショー作成
- ・メモ用紙に書いた属性語をイラストカードにする
- ・イラストカードの分類・整理整頓
- ・イラストカードを作成、印刷
- ・メニューきめの答案用紙を記入。
- ・工程表を作成。
- ・レシートを貼る。
- ・連絡帳の整理整頓
- ・イラストカードの整理整頓。
- ・必要な支援グッズを作成(掛け布団、スケジュールボードなど)
- ・ケース記録の記入



左下は事務所で教材準備、右下は集団活動の司会進行している風景である。  
本当に日々つみきの支援に協力していただき、感謝しています。



#### IV 集団支援実践

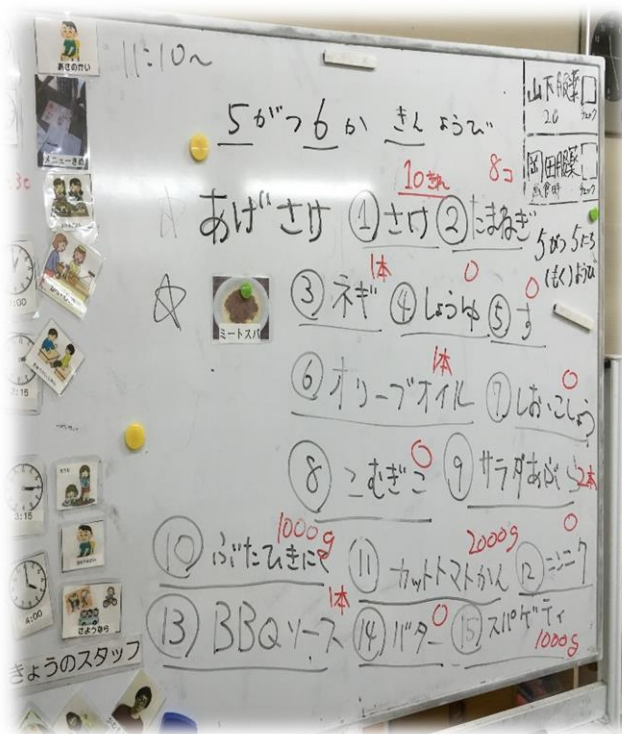
「集団も個別化」これは筆者が現場1年目のときに療育の先生からアドバイスをいただいた言葉である。本章では集団支援をご紹介させていただき、

##### 1) 調理のメニューきめ

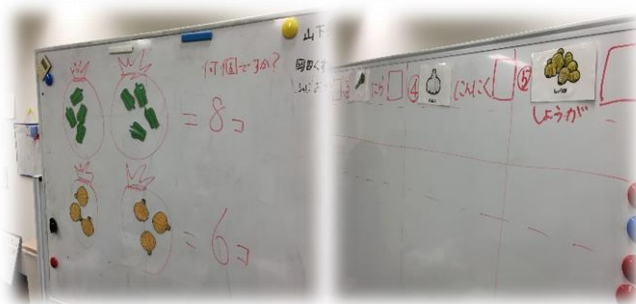
つみきでは調理実習が週2回行われている。そのためメニューの内容を前日に多数決で翌日のメニューを選んでいった。

右の写真は引っ越しをする前の様子である。写真を見てわかるように、字が汚い。みにくい。わかりにくい。スケジュールとか服薬チェックなど関係ないものも一緒にぐちゃぐちゃ。ホワイトボードの後ろにもものが置いてある、など挙げればキリがない状態であった。これに加え、口頭や文字で伝えることが多かった。

これらの課題は振り返りで早急になんとかしなければならぬとして次のような工夫を実施した。



- ・写真カードを用いるようにした。
- ・写真カードを選ぶ。
- ・何が必要でいくつ必要なのか考える。
- ・計算をする。
- ・余計な情報を少なく。
- ・食べたいものを発表する。
- ・食べたいものを献立表に反映する。
- ・材料の有無を確認。



左の写真は完成した献立表である。完成した献立表は毎月、家族さんやお弁当屋さんに周知している。

お弁当屋さんのご好意で調理のメニューと被らないように日替わり弁当のメニュー内容を配慮してくださっている。

こんだてひょう  
つみき献立表  
January

Sun	Mon	Tue	Wed	Thu	Fri	Sat
1	2	3	4	5	6 はっばうせい ごはん みそしる	7
8	9	10	11	12	13 パンパンジー みそしる	14
15	16	17	18 にしやが ごはん みそしる	19	20 ハンバーグ ごはん めだまやき	21
22	23	24	25 しょうがやき ごはん みそしる	26	27 オムライス コンソメスープ	28
29	30	31				

献立の決め方については下の写真のようにプロジェクターと Apple TV と Ipad を用いて、インターネットで検索してどれが良いか写真を見て選んでいる。また食べたいものが決まっているときは発表していただき、それを調べて他の学生たちの意見を聞くという形だ。作り方についても同じ手法で調べ、調味料、材料は何をどれぐらいいれるかを一緒に決めている。

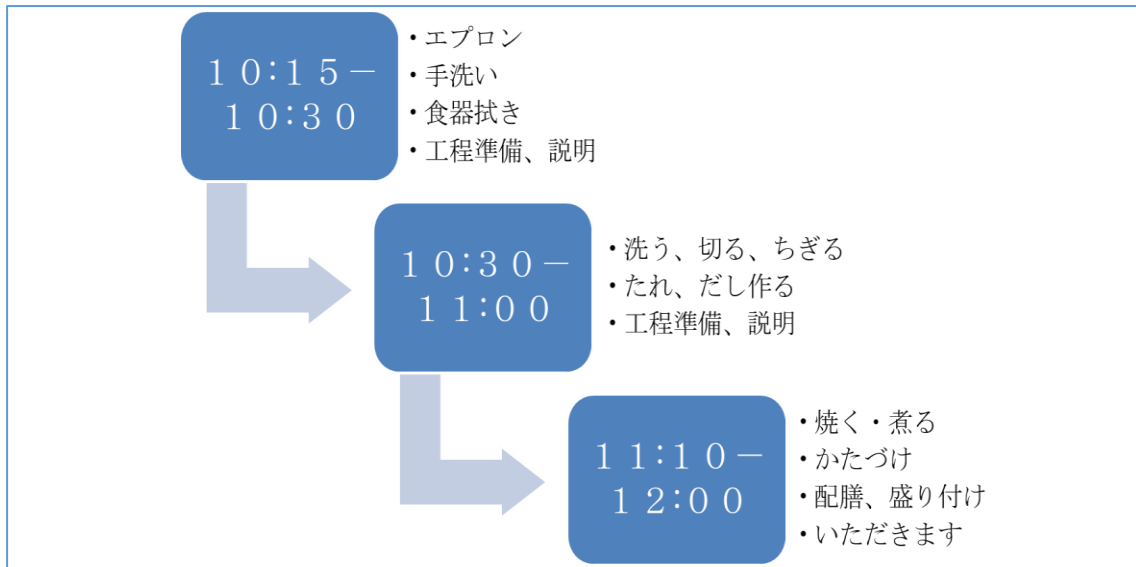


まとめると、メニュー・作り方は Ipad を用いて決める。次に調理のメニューきめの司会進行が誰でもできるよう答案用紙をパートさんに作成していただく。そしてホワイトボード、写真カードを用いてメニューきめの司会進行をするといった流れである。

実は調理のメニューきめは買い物に行くための準備であるため、本来は買い物とセットで報告したかったが、今回は時間の都合で割愛させていただく。

## 2) 調理

2015年の6月初旬、あまりにリスクが多く、調理の時間がかかりすぎたため、一度、客観的に活動を見直したほうがいいのかとスタッフから意見があがる。パートさんに協力していただき、スタッフ：利用者：観察者＝3:9:1で5回にわたり、行動観察を実施。分析すると、リスクが50以上あがった。「これはまずいでしょ」ということで、調理において必ずしている共通動作を取り上げ、次の3段階にわけた。



このことから、共通動作のカードを作成し、自己選択できるような構造化を進めることで、気になるリスクは減少するのではないだろうかという仮説を立てた。仮説を立証するために半信半疑ではあったが、試してみることにした。

これまで学生たちの行動の開始は、スタッフの声かけで始まり、いわゆる指示待ちであったが、左下の写真のように選択できるよう工夫したところ、自発的に選び、用意して取り組もうとする姿勢がみられた。そこで初めて我々スタッフがこれまで「それが障がいの特性なのだから仕方ない」と大きな誤認をしていたことに気づいた。

その後、自己選択できるような構造化を進めていった。(右下の写真)



現在は学生一人ひとりが「包丁で千切りに挑戦したい」「わかりません」「てっだってください」「できました」など、これまで表出が少なかった学生たちとは思えないくらいに自発的な思いを発信している。

右下の写真に写っている男性は集団活動や読み書きなどが苦手で男子トイレで過ごされることが多かったが、構造化を進めていくなかでとても苦手だった調理へ自発的に参加できるようになった。左下の写真は現在の手順書の一部である。



### 3) 活動に関するさまざまな工夫

#### ① スタンプカードの取り組み

各活動後にスタンプを押すことで終わりの見通しをたてる工夫をしたところ、スタンプをもらうために良い行動をしようとする学生が多くみられた。そのため、お手伝いや良い言動、あいさつなどできていれば、スタンプをもう1個、押すといった取り組みを行っている。

2月にお試し期間を実施した。お試し期間では、家族さんの協力のもと1ポイント1円としてお手伝いやあいさつ、良い行動ができればスタッフからスタンプが貰えるといったキャンペーンであった。実際に一日の終わりにお金を事務所でスタッフから貰って、いくら入っているか数えて間違いなければ、受領書にサインしてスタッフに渡す。これを10日間、続けた。



結果、学生たちはそのお金でお菓子やジュースを買ったり、自分にごほうびで使うその日までカレンダーで毎日チェックしていたり、寝る前に小銭を数えたりしていた・・・など家族さんから好評なコメントをいただき、第2弾を計画しているところだ。余談ではあるが、小銭を入れるポチ袋は学生たちが作っている。



## ② スタッフの行動を可視化

スタッフと一緒に話したい、関わりたいという利用者は多い。それゆえにスタッフを巡って利用者同士で口論することやイライラしてしまい、モノにあたってしまうことなどしばしばみられる。

そこで今はお話できる時間、ごはんを食べている時間などスタッフの行動を可視化することで、混乱を避けることにした。

「おはなし◎にスタッフカードがあるときはその人と10分間お話ができます。」



## ③ タブレットも活用

お出かけや買い物などのときに試作的に導入している。

利用者の大半は理解して、こちらの声かけなくスケジュールを確認することがある。またスケジュール・手順を自身で入れ替えてスタッフに交渉する姿もみられている。



### ③ 行動表の提示

取り組む前は、パニックになられる方、気になる行動がみられる学生が何人かいた。

スタッフが外出するときなど、特記があれば、記入し、学生たちへ周知するように工夫してから気になる行動は減少している。

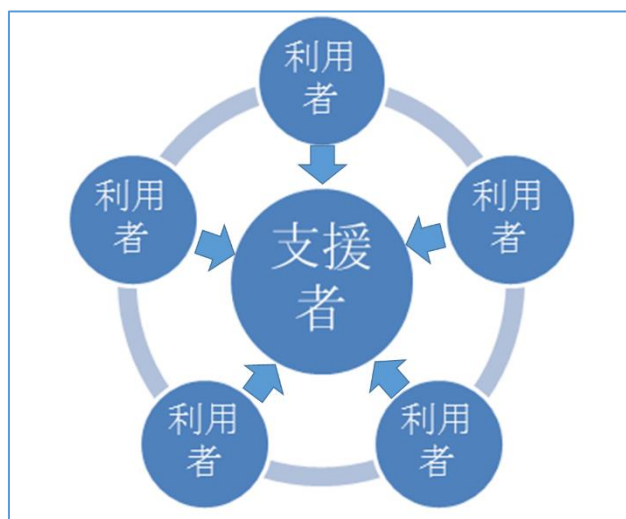
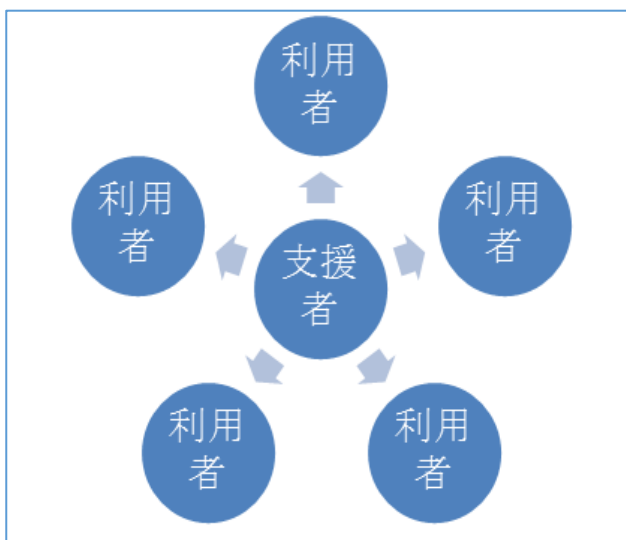
スタッフ		行動表	表
たかはし			
かねもと	10:00-11:00	かなざくしむかえにいま	
水			
おおやぶ			
あおしま			
土			
日			

おわりに

構造化・視覚支援する前は右図のように、スタッフから学生に対して声かけをしたり、荷物を片付けてしまったり、応答コミュニケーションでのやりとりが日常的になっていた。また覚的なツールは少なく、スタッフの声かけで活動部屋内はにぎやかで利用者は指示待ちであった。

しかし、構造化やスタッフは「座ります」「かきます」など写真カード、文字カードで促すといった視覚支援を取り組み始めるようになってから、学生からの「〇〇さん手伝ってください」「〇〇ください」「〇〇したい」「できました」などの自己発信が増えるようになった。また手順書やスタッフのお手本をみて片付けをするようになる。何より自発的な行動が増えた。

以上のことから学生たちの自立を促すうえで、構造化は大切であることはいうまでもないが、今後この良いサイクルをどう深めていくかが課題である。





## 参考文献

- ・井上編（2010）『自閉症の子どものための ABA 基本プログラム 家庭で無理なく楽しくできる生活・学習課題 46』学研教育出版
- ・上村、吉野著（2014）『家族の体験記から学ぶ 発達障がい ABA ファーストブック』学苑社
- ・木下著（2011）『<しょうがい>のある思春期・青年期の子どもたちと<性>おとなになりゆく自分を育む』かもがわ出版
- ・小出監修（不明）『どの学級でもできる新生活単元学習』学習研究社
- ・財団法人 日本知的障害者福祉協会（2005）『知的障害者のためのアセスメントと個別支援計画の手引き 2016 年度版 一人ひとりの支援ニーズと支援サービス』財団法人 日本知的障害者福祉協会
- ・シーラ・リッチマン著 井上、奥田監訳（2005）『自閉症への ABA 入門 親と教師のためのガイド』東京書籍
- ・瀧本 吉田編（2011）『わかりやすい発達障がい・知的障がいの SST 実践マニュアル』中央法規
- ・竹沢著（2008）『子どもが見えてくる実践の記録』全障研出版部
- ・はた編（2003）『DNA パラダイスー27 人のアウトサイダーアーティストたち』財団法人 日本知的障害者福祉協会
- ・フロストボンディ著、門監訳（2008）『絵カード交換式コミュニケーション・システム トレーニング・マニュアル 第 2 版』（株）ピラミッド教育コンサルタントオブジャパン
- ・平井 村田編（1995）『自閉症指導シリーズ 1 かかわりを深める 人間関係の成立と発展のみちすじ』教育出版
- ・平井 村田編（1999）『自閉症指導シリーズ 2 こだわりをとく 常同行動・固執からの開放』教育出版
- ・宮田編（1998）『現代心理学シリーズ 2 脳と心』培風館
- ・村田著（1998）『四訂版 教養の心理学』培風館
- ・村田、川村ほか（1988）『養護・訓練指導ハンドブック 発達を促す遊びの指導ー重度障害児のためにー』学習研究社
- ・安本監修『支援のありようで利用者が変わる●施設訪問コンサルテーション事例集●』一般社団法人 大阪知的障害者福祉協会